「逃げたら、アカン。逃がさへん。」

亀井勝さんが、二〇〇四年に出版した著書『逃げたらアカン』は、誰に呼びかけているのか。
福祉施設の職員、行政の方々、
いやいや、障害者を視野から外そうとしている我々か。
障害者は、どこにも逃げられない。
だから、亀井さんは、「逃げたら、アカン」を信条に生きてきた。
誰も、逃がさへんで、と叫びながら…。

亀井 勝さん
社会福祉法人ひびき福祉会 理事長
（大阪府東大阪市）

編集部＝文
text by Kotonone
岸本 剛＝写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto

理事長 亀井 勝さん

障害者のためなら、言うべきことは言う

恐る恐るでかけた。

東大阪市の社会福祉法人ひびき福祉会の取材。大阪と奈良を結ぶ近鉄奈良線の八戸ノ里駅に、理事長の亀井勝さんが直々に出迎えてくれた。理事長自らとは申し訳ない。恐縮していると、「いやあ、わしがいちばんヒマやから、気にせんといて」と、にこやかなご返事。柔らかい物腰、やさしい表情の奥に、強靭な芯が潜んでいるんだ、と自分に言い聞かせる。

取材に備えて、亀井さんが二〇〇四年に書いた著書『逃げたらアカン』を読んだ。その巻頭は、こんな宣言で始まっている。

「悪口ととられるかもしれないが悪口ととるなら書かれた人の方が悪い。批判をする人もいるだろう、反論もあるだろう、大いにしていただきたい。」

読み出したら、まさしく、前書きで断った通りだった。役所でも障害福祉や社会運動の団体でも、真っ向批判している。同じ施設の仲間でも容赦はしない。直言の人なのだ。

幸福地蔵尊に祭られる利用者を味方につけて

車で一〇分ほどで本部に着いた。前庭は、車で埋まっていた。その車の奥に、「幸福地蔵尊」を見つけた。亡くなった利用者の方たちを弔うために建てられた。二八年前にできた当時は、利用者が三人ほど祭られていた。いまは、二〇人を超えるという。幸福地蔵尊に手を合わせて、勇気をもらってから取材にのぞむことを思いついた。

この地蔵尊に、最初に祭られた人のことが、本に書かれている。

―中村文彦さんが亡くなったとき、お父さんが言った言葉は「私たちより先立つことは、文彦が私たち夫婦にしてくれたたった一度の親孝行です」であった。障害のある人ができる親孝行とは生んだ親よりも先に死ぬことなのだろうか。―

中西加代さんが亡くなられたときは、

―お父さんと話し合ったとき、「加代は誰の世話も受けん、わしが死ぬときは先に加代の首を絞めて、それからわしが死ぬ」と、お父さんをここまで追い詰めた原因は家族の問題等いろいろあった。しかし加代さんが亡くなった時には「加代は親不孝な娘です。わしより先に死によって」と泣いて話された。加代さんは四十二歳、お父さんは九十歳になっていた。―

お堂は元宮大工の亀井さんが腕を振るった。材料は最高級の木曽檜。六本丸柱の方形屋根（四方に流れた屋根）。隅垂木は反りを加えた見事な技術。亀井さんご自慢の説明を聞いてから、地蔵尊に手を合わせた。

これで、利用者から勇気をもらった。さあ、取材へ。